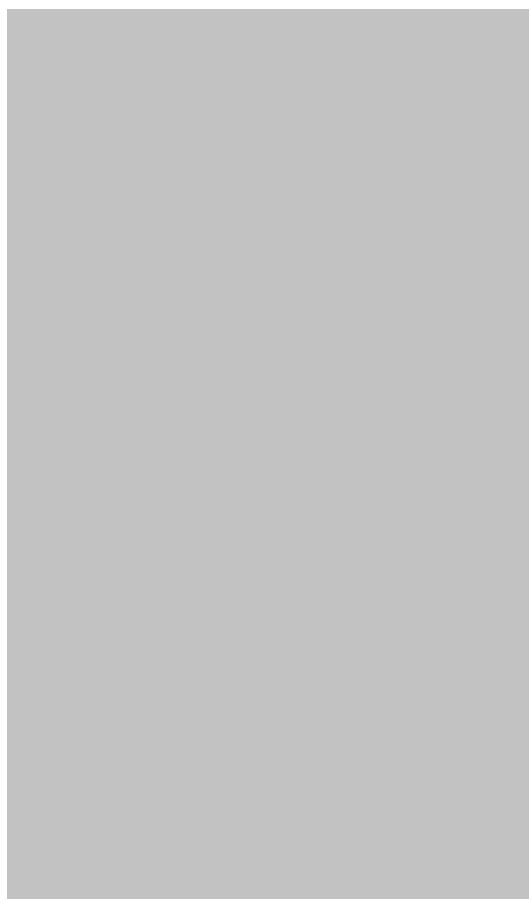


芹沢銈介

《津村小庵文藍地紬裂》



芹沢銈介 (1895-1984)
《津村小庵文藍地紬裂》

1955年
絹、型染
55.5 × 33.3cm
平成27年度寄贈

平

成二十七年、東京国立近代美術館は芹沢銈介の作品を四三〇点ご寄贈いただきました。それまでの芹沢作品の収蔵が四十三点ですから、約十倍になった計算です。本作はそのうちの一つ。連なる山々、草木は茂り、鳥舞う景色が藍の濃淡で染めだされています。そこに一軒の茅葺屋根の家があり、よく見れば縁先で一人の人物が、片肘ついて寝ころんでいます。なんとものどかな情景です。

以前よりこの人物は、芹沢銈介本人ではないかとも言われています。タイトルの「津村」は、神奈川県鎌倉市の地名。一九五六年に「型絵染」で重要無形文化財保持者（いわゆる人間国宝）に認定されて以後、急に騒がしくなった環境から逃れるように、芹沢は農家の離れを借りて週の半ばだけ独居しました。そこで芹沢は新聞、テレビ、電話もないまま仕事に専念、そして一人の時間を満喫したのだといえます。さて風景の中の建物や人物は、それが焦点となつて画面に誘う働きを持ちます。伝統的な風景画の作例では鑑賞者は景観に表された理想の世界に遊び、同一化を促されましたが、この作品ではどうでしょうか？ 古画に比べると建物がずいぶん大きく存在が際立ち、それを取り囲む、あるいは並ぶ山々も、一般的な風景描写とは様子が違って、模様を納める一種の

フレームと化しているようです。これは沖繩の型染、紅型びんがたでしばしば採られる手法であり、そしてこの紅型こそは、芹沢を強く魅了し、染色家への道を切り開いたものでした。保持者認定を区切りとして、一方向に進んできた流れから少しの間外れ、非日常を日常と重ね合わせて、そうして自身の創意の根源を見つめ直す時間を、芹沢はこの場所に見出したのかもしれない。

ところで模様というものは、自然界に由来するモチーフであっても単なる描写にとどまらず、その真髄まで研ぎ澄まし、ついでにそれらが属していた世界との関係性を断ち切ろうとする傾向があります。そうでなければ器物や衣裳などの模様をあしらうボディの多様な形態と、使われる状況によって絶えず変化する見え方に適応することが難しくなってしまうからです。そうしてみると、もしかしたらこの作品に占める建物の大きさには、壮大な自然への憧憬よりも、自然を模様という人工のフィルターで捉えなおそうとする姿勢が反映されているのではないでしょう。しかしそんな理屈をさかしげに振りかざさず、知らない風を装うのが、芹沢の――あるいは工芸の信条。寝ころがって草を見る図には別バージョンがあり、やはり今般の受贈品《津村の小絵馬》に納められています。（工芸課主任研究員 今井陽子）